七月革命とバルザックの政治思想

大津真作

バルザックの作品は、近代市民社会を写す鏡である。われわれは彼の作品を通じてこの社会の本性を知ることができるし、このような背景の中で様々な価値観をもった人間の衝突を目の当りにすることもできる。そして大革命後に誕生したこの社会が、実は個体同士の紐帯を金によって断ち切った社会に他ならぬことに思い至るのである。それゆえ彼は、よくいわれるように、近代市民社会の叙事詩人なのである。だが、彼が近代市民社会において初めて登場した諸現実を詳細に描いているからといって、この社会を積極的・肯定的に評価する立場をとっているかといえば、これは必ずしもそうとはいえないのである。すなわち、彼の価値判断は往々にして事実叙述と矛盾しているのである。こうした矛盾の発生を、バルザックの政治的・社会的思想との関連において追求してゆくこと、これが拙論の課題である。

今私は端的に矛盾といったが、この点を少し詳しく前提的に述べておきたい。まず彼が作品においていかに新しい現実を描いているかをみなければならない。近代市民社会の新しい現実といえば、なんといっても、一平民が大商人・大政治家等に成り上ってゆけるという経済的・政治的可能性の発生をあげないわけにはゆかない。このような全く

新しい現実を単なる立身出世物語として肯定的・無批判的に描くのではなくて、個人の上昇・下降過程を貫通している、より広範でより深遠な経済的・社会的法則の剔抉をも含めて、より全体的に描写する必要がある。こういう技法――小説観が明示的に表現されているバルザックの代表作のなかから、今一例として『セザール・ビロトー』（一八三七年）をとりあげてみることにする。

ここでバルザックの描いている現実とは、副題の示す通り、一商人（ブルジョアジー）の栄枯盛衰、有為転変である。そこには、封建社会では全く考えもつかなかったような新しいディテールが、あたかも経済学者の筆になるかと思わせるほど見事に描きこまれている。そもそも香水なるものが、王室御用達の品にとどまることをやめて、大衆化（市民化）し、企業化され（自由競争に委ねられ）たという事実、またこれの販売の為の苛烈な広告合戦――あの誠実無比なポピノでさえ、ゴディーサルの二枚舌と商業紙上での誇大広告（この新聞広告という発想自体斬新である）なしには成功しえなかったであろう――、特別剰余価値の追求を至上目的とした発明競争、科学と産業の緊密な結合の事実等は、近代市民社会の典型的事実でなくてなんであろうか？　更に、バルザックが本作品を執筆した時期の状況を反映しているのであろうが、ビロトーの没落の原因となった土地投機および手形操作の描写、大銀行家（金融貴族）フランソワ・ケレルが政治家としても描かれていることも、この社会の特徴を正確に表現したものといえよう。バルザックの描く現実は、まさに「彼らのいうことはみんなもっともだ。金だ！　金だ！」（『セザール・ビロトー』ガルニエ版、二五三ページ）とビロトーをして慨嘆せしめるような金権社会（＝七月王政）、あのクルヴェルによって象徴される現実なのである。

ではバルザックはいったいどのようにこれを描いているのだろうか？　この疑問に答える為に、今ビロトーの没落の原因を考えてみることにする。ここでもバルザックは、まるでビロトーの個人的な名誉欲の肥大の結果として（邸

宅の改装・投機欲等々）この没落が起こったかのように描いている。あるいは、デュ・ティレのビロトー家に対する癒しがたい復讐心の結果として描いている。しかしこれはバルザック特有の作品構成観を如実に物語るものに他ならない。すなわち、近代市民社会全体の諸法則の作用を、それ自体として示すのではなく、一個人を通して、彼の私生活を通して描くこと、これである。このような構成観は、全くバルザックの天才性を示すものだが、それは初期の作品から晩年の作品に至るまで絶えず表現され、一貫した見解をなしているのである。たとえばそのことを確かめる為には『パリ生活情景』や『幻滅』を考えてみるだけで十分である。ビロトーの没落の原因は、より根本的には、近代市民社会の固有法則が実直・勤勉な小ブルジョアを通して作用したという点に求められなければならないのである。ついでながら、バルザックの諸作品から、主人公の幻想的で強力な魔性なるものをそれ自体としてとりだしてきて、あれこれ論ずることは、諸人物を「私人」に押しこめてしまう恐れなしとはいえない。バルザックの作品分析にあたっては、つねに人物の魔性を通して意識的・無意識的に描きこまれている全体性およびその法則を解明しなければならないのである。バルザックが念頭においている全体性とは、『セザール・ビロトー』においてもまた、「人間が人間にたいして狼である」というような世界である。この世界は人間を物欲によって孤立化せしめ、彼ら相互の紐帯を金によって断ち切ってしまったような世界である。ここでは人間が一個の原子、求心力から解放されて無限の空間を浮遊している原子なのである。このような現実が多くの「自然主義」的な作家をして、「あるがままを描けば良い」とする私的・観照的小説観にゆきつかせたとしても（けだしアトムをそれ自体として描くということは、結局近代社会においては、孤立的個人を求心力場のないところで丹念に描くということに帰着するから）、バルザックの場合には——彼には求心力が存在する——そうではないのである。彼は専らデュ・ティレとビロトーの復讐劇をタルチュフ風に描こうとして、その実彼ら相互の行動を包む世界を描写してしまっているのである。すなわち、彼は今述べたような社

会が全体として、詐取や偽善を正当なものと見做し――デュ・ティレを正当とし――かつては至上の精神的価値と見做されていた「実直」「篤実」「誠意」――バルザックはビロトーを形容する為に、幾度となくこうした表現を用いている――等を、一文の値打もないものとして捨て去っているという公的な事実を描写してしまったのである。この意味でバルザックは近代市民社会の叙事詩人なのである。彼はみずからの広範かつ歴史的なパースペクティヴについて、この小説のなかで、以下のように語っている。

「(……)これらは〔町、国家、観念、制度、商業、事業等〕貴族の家柄や王朝と同様、発生し、興隆し、そして滅亡する。この地上で組織されているあらゆるものに適用されている生成と衰微の法則の峻厳さは、いったいどこからきているのか？　歴史は、地上のあらゆるものの興隆と衰頽の原因を繰り返し物語りながら、人間に、その全能力を停止すべき時期を教えてくれるだろう」(強調は筆者による。前掲書、七〇ページ)

ブルジョアの栄枯盛衰を法則的に描くことは、今まで誰も企てたことがないというバルザックの自負は至当である。一九世紀の前半においては、ブルジョアジーは勃興しつつある階級を形成していたのである。この事実を前にしてもなおかつ、ブルジョアジーの支配が、決して合理的でも永遠のものでもないとバルザックがみてとっていることは、まさに刮目すべき天才的直観である。彼には、以上述べたように、描こうとした対象を規定する全体に対する考察があったからこそ、近代市民社会の新しい諸事実を、重要でない現象を見事に割愛しながら、魔力的存在＝典型の高みにおいて形象することに成功しえたのである。

今や、バルザックの批判的見地の特徴を述べておくことが不可欠である。この点こそ、バルザックのリアリズムの限界を現わし、事実叙述と価値判断との矛盾を露呈するものだからである。『セザール・ビロトー』の文脈に再びそっていえば、ビロトーは近代的商業の担い手らしからぬ資質をもっている。彼は「盲目ではあるが善良、才知はない

けれども非常に信心深く」「清純な心をもっていた」（前掲書、六八ページ）。他方、デュ・ティレはその精神からして悪辣であり、また、金を左から右へ動かすだけで大儲けしている才知にたけた人物ということになっている。この両者の対照において、バルザック自身の同情とその立場は、明らかにビロトーの側にある。バルザックは小説において、「公平無私」な観察者であったというのは伝説である。リアリズムをそのようなものとして、すなわち無傾向なものとして描きだそうとすることは、彼については、全くの誤謬である。バルザックの小説を素直に読めば、彼自身が至るところで近代市民社会の諸機構・諸思想と衝突し、彼自身の世界観をこれに対置している様がみられる。およそリアリズムは静観的なものではありえず、死に物狂いの格闘なのではないか？　ところで、『セザール・ビロトー』において、この点をはっきりさせてみよう。先に述べたような資質をもったビロトーは、「実に稀有な復権判決」（前掲書、四〇四ページ）を獲得し、見事に昇天する筋書になっている。あるいは、ポピノ（かの廉直判事ポピノの縁者）の活躍からして、バルザックの立場が現われている。ポピノはビロトーの良い資質をすべて継承した人物で、刻苦勉励を旨とするピューリタン的人物として設定されている。そのうえバルザックはこのポピノに最大級の賛辞を贈っている。それは彼が慧眼にも見抜いていた社会の本性とは全く相容れないものでさえある。いわく、「誠実」「崇高」「善良」「慎しやか」等々。こうした人物が自己の才覚と努力によってのみ、義父の大借財を支払いうるような商人に成り上ってゆくという筋書をバルザックが組んでいること自体、近代的商業の本質――それは詐欺であると彼はいっていた――そのものと矛盾しかねないものであるし、またそのことをあえてバルザックが承知しながらもなおかつ、こうした筋書を組んだという事実には、実はバルザックの世界観が現われているのだという風にみる必要があろう。つまりバルザックは、現実と自己の見解との対置――これこそリアリズムを生みだすのである――のはてに、ここでは（バルザック的な）リアリズムに反してまで、ビロトー――ポピノ陣営に与しているのである。その結果、大筋に

おいてバルザックは市民社会の新しい現実を見事に描いたけれども、それに批判を加えるためにもちだされた彼の世界観が依然としてかなり古臭い代物であった為、彼の批判自体が現実性（リアリティ）をいささか欠くものとなってしまったのである。そしてこの点で彼はみずからのリアリズムを裏切らざるをえなかったのである。このように、大筋において全体性の正確な描出に成功しながら、いざ自己の世界観を小説化しようとする段になるとみずからのリアリズムを裏切らざるをえないという矛盾、すなわち事実叙述と価値判断の決裂は、近代市民社会成立期におけるリアリズムの特徴をなすものであり、バルザックもまた、このような弱点をまぬがれてはいなかったのである。

こうしたいわば「党派に偏した」リアリズム、傾向性をもったバルザックのリアリズムが、全体性の正確な描出という意味でのリアリズムと、時として矛盾しながら現象しているという事実の裏には、バルザックが断固として、「ひとつの」政治的立場を採用したという事実が隠れているようである。事実、ビロトーはかの王党派ヴァンドネス子爵をはじめとする貴族の助力、国王の「手許金」の下賜にすら恵まれて、「一〇年に一回辛じてあるかなしか」（前掲書、四〇四ページ）の復権判決を受けることができたのである。それもひとえに彼が終生国王に忠誠を誓ったレジティミストだったからである。確かに七月王政期を生きたバルザックにとって、レジティミストの価値観は、近代市民社会＝ブルジョアジーの支配する世界の価値観と対立するものであったし、それなりにひとつの現実を形成していたから、バルザックがそれを描いたのだという考えも成り立つだろう。だが、既に述べたような点を考慮するならば、やはりここでは、バルザックが近代商業の担い手として、わざわざレジティミストを選んだということにある種の意図を感じないわけにはゆかないのである。つまり彼がこのように描き、このように筋書を設定したということは、彼が既にレジティミストだったという政治的立場と不可分のものと考えざるをえないのである。

このような政治的立場をバルザックが選択したからには、今度はこのような立場の方がバルザックを規定しはじめ

ることになる。今まで曖昧で振幅の激しかった社会観が、批判的営為の展開という赤い糸によって貫かれるようになる。今まで必ずしも観察されてきたとはいえないような諸事実がバルザックにみえてくるようになる。批判が一貫してくるにつれて、余分なディテールが省かれ、人物がますます典型に昇華してゆく。登場人物はすべてある理念によって動かされているかのように描かれ、そして対立・抗争はますます激しく非妥協的に描出されるようになる。こうしてバルザックの晩年の大作『農民』にその片鱗がうかがわれるような、いわば党派をこえた真の、客観的・科学的なリアリズムが成立するのである。しかし彼のリアリズムは、だいたいにおいて、その頂点にまで達したとはいえない。統一の萌芽がみられるが、事実叙述と価値判断は、たいてい矛盾している。そして彼は一貫してこの矛盾を隠さない。実に堂々と自己の政治的立場を広言してはばからない。一方では批判の武器として役立ち、他方ではみずからのリアリズムを危くするようなこの立場は、どういうものであるか？　またそれはどのようにして採用されたのかをここでさぐらなければならないだろう。

そこでバルザックがいつ頃、近代市民社会に対する批判的意識をもつに至ったかが問われなければならない。われわれはその決定的な時期を七月革命においてみよう。この革命こそは、多くの文人・芸術家に立場決定を迫ったからであり、また近代フランス固有の矛盾（その背景にはブルジョア社会の一般法則＝恐慌がある）を典型的に表現したものであったからである。当然のことながらバルザックの批判的意識もこの時期に明確になってきているのである。

★

バルザックは、二つの点で王政復古に不満を抱いていた。第一に王政復古政府が老人政治家（ジニョントクラット）の集まりであること。つまり（七月革命勃発直前の）『現今の風俗にかんする諷刺的愚痴』に示されているように、現政府は共和国・帝政・

王政復古期の三代を代表する老人政治家の牛耳るところだというわけである。「これから存在するはずのものすべてを代表する」（コナール版『雑集』Ⅰ、一二九ページ）青年は、まず肩書によって政治から遠ざけられていたのである。第二にそれが金によっても支配されていたという現実である。この認識は、バルザックが実際に出版業を営むなかから得られたものであろう。先に述べた書物のなかで彼はこう愚痴っている、

「この時からエゴイズムが勝利している。（……）法律も著作物も風俗も金の臭気を発している。（……）金権はわれわれを貴族制のうちでもっとも悲しむべき制度へ、拝金主義者の貴族制へと導いている」（前掲書、一三一―一三二ページ）。

このような世界のなんらかの変更を青年バルザックが望んでいたとしても不思議ではない。しかしそれが、貴族の座にブルジョアジーが上昇し、ブルジョアジーの全一的支配をうちたてることであったかどうかは問題である。なぜならバルザックは、エゴイズムと拝金主義の跳梁跋扈するような世界は、早晩「パンをもたざる」民衆によって覆されるだろう（そしてその先の世界は無政府・無秩序のカオス）と考えていたからである。したがってこのような新たなるアナルシーを避けなければならない。この点でバルザックはサン・シモンの構想に接近するのである。但しレジティミスト（レジティミテ）的に。つまり彼は玉座の正統性と正統教義（カトリック）をもってアナルシーを回避しようと考えるわけである。七月革命前夜のバルザックがサン・シモン派（の調和的・有機的世界観）に接近しつつ、他方でラムネーの宗教改革運動にも関心を寄せていた本意はそこにあったとみなければならない。ついでながらこの時期にバルザックは、『田舎医者』『村の司祭』の源泉と考えられる改革事業に初めて遭遇し、それに一定のコメントをつけ加えている。バルザックはいまだに一定の世界観を抱懐するに至ってはいない。しかし今述べたような方向をたどりつつあることは事実なので

ある。バルザックは一八二五年以来、あの『紳士の法典』にみられるようなブルジョアジーの支配についての、その無政府的経済活動（これを彼は政治の分野にオーバー・ラップさせて考えている）についての批判的洞察と危機感をもっていたのである。彼がエゴイズムと拝金主義の原理に批判を加えながら提出しようとした原理は、『近代的政府論』やベナシス像となって表現されようが、それは七月革命後に生じた、また存続していたアナルシーに対する治療薬となるであろう。したがって、この方向性をわれわれは見失わないようにして、今後の検討を進めなければならない。

★

七月革命直後のバルザックの政治的見解を見事に表現している文書は、なんといっても『パリにかんする手紙』であろう。この『手紙』のもつ重要性は、『両内閣の政治にかんする調査』（一八三一年四月）→『出発』（一八三二年一月）→『近代的政府論』というコースのうちにバルザックの転回をみるわれわれにとって、いわばその出発点にあるという意味で強調され、かつ分析されておかなければならない。

この『手紙』は、バルザックの友人エミール・ド・ジラルダンが自分の新聞『ヴォルール』に革命後のパリ情勢を執筆するようにバルザックに依頼したことからできあがったものである。同紙が大衆的な新聞であったことから、バルザックの論調には諧謔的なところもあるが、われわれは既にバルザックのたどった道の概略を知っているわけであるから、『手紙』の各所に表現されている彼の立場を解読することは比較的容易である。

(1)　バルザックは「栄光の三日間」の目撃者ではなかった。彼は革命の沸騰期には、ちょうどツール郊外に旅行中であった（この旅行と政治的ロマン『田舎医者』の創作には重大な関連がある）。このような条件が、バルザックを

して革命からの現実的利益の引き出しを困難ならしめた。首都にいた文人の多くが（スタンダール、メリメ、ジラルダン等）一種の「猟官」運動によって新政府の一員となることに成功した。それに反してバルザックは、新政府の政策に最後まで共鳴せず、あまつさえ「もっとも強力な反対派」＝レジティミストになったのである。その理由のひとつは、バルザックにとってこの革命はなんの利益ももたらさなかったという点にあると考えられる。実際、のちにみるように彼は内政・外交のあらゆる分野で新政府を攻撃しているのである。しかも彼には革命の余韻とかロマンティックな論調とかがみられず、かえって客観的に事態を描写し、それを通じて自己の政治的立場の確立を図っているのである。この不思議な態度はやはりバルザックがこの革命から期待していたものを受けとらなかったのではないか、と想像させるものである。この『手紙』は、このような想像が当を得ていることを裏書きするかのように、革命の原動力と政治家との対照的描写から始まっている。

「真の勝利者たちは、いかなる戦いにおいてもそうであるように、結構冷遇されている。若干の官庁における彼らの待遇は気の毒なものだが、もう少したてば官僚たちは彼らを叛徒と呼ぶことだろう」。これに対していわゆる世間というものはどうか？「街路はいつもの光景を取り戻した。洒落た馬車やいろんな乗物、それに流行のスタイルが以前のように往来している」のである。革命によってなにかが変化したのだろうか？「政府は進歩と復興（レストラシオン＝レストレ）された王政復古の定常状態（スタッ・クオ）との間をふらついている」（コナール版『雑集』II、六五―六六ページ）という体たらくである。バルザックは、革命の成果は当然革命の原動力であった民衆、とりわけ青年の手に帰すべきだと思っている。であるのにそれは青年の手に帰してはいない。それは老人政治家の手に落ちたのである。こうした政治家に特有な政策は「純正中庸（ジュスト・ミリュー）」であり、平たくいえば「妥協」と「優柔不断（アンデシジョン）」「動揺（ラシヨン）」（これらの用語を彼は頻繁に用いている）の連続なのである。彼らは不思議なことに、権力を握っているのに憶病である。バルザックは権力を強権と同一視してい

るからこう考えているのである（このような権力観は生涯を通じて変化することがなかった。マキャベリスト＝バルザックが語られるゆえんである）。そしてもしこのような動揺が持続するなら、やがてはルイ・フィリップもこれらの老人政治家によって、かつてのシャルル一〇世の境遇と同じ境遇に陥れられることであろうとバルザックはみている（前掲書、六七ページ）。青年を筆頭とする「才能を自覚している人々」（前掲書、七〇ページ）は、革命後も相変わらず「公事」から遠ざけられており、半失業状態にある。それゆえバルザックはベルギー問題にこと寄せながら「ブルジョアジーは人民を裏切っている」（同ページ）と断罪しているのである。以上のように、『手紙』の第一信の冒頭での対比、それに続く老人政治家の非難、末尾における「裏切り」という言葉、これらはバルザックの七月革命観を予言的に表現しているのである。彼は後続の手紙において、このような立場を更に敷衍しながら述べてゆくことになる。

(2)　七月革命後の紆余曲折のなかで一貫してイニシャチヴを握り続けたのは、王政復古期において既に自由派ブルジョアジーの頭目として有名であった、ギゾー、クーザン、ラフィット、ティエール、カジミール・ペリエ等の政治家である。これらの人物は、バルザックによれば、フランスの未来を託すに足る才覚をもってはいない。彼はいう、

「われわれは偉大な革命をやった。そして革命は若干の小人物の手に落ちた。ここにわれわれのあらゆる不幸の秘密があるのだ」（第三信、七九ページ）。

こうして「政治の問題は人物の問題になってしまった」（前掲書、九四ページ）からには、もはや現在は「一七八九年の前夜ではない」のである。革命は結局政治家の闘争の道具になってしまい、こうして「全フランスは類稀なる本能でもって、権力が有能な人物の手中にないことを感得している」（一五一ページ）。革命がこんなに小さなクー・

デターにすぎなかったとすれば、全フランスが変化したなどとはとてもいえるものではない。バルザックは、革命前後において事態がなんら変化しなかったことを農民の口をかりて見事に表現している。

「われわれは鐘楼に白旗に代って三色旗が掲げられているのをみた時、こういいあったものでした。「これからはなにもかもうまくゆくだろう……」と。けれどもわれわれは欺かれたのでした。なぜなら郡長も政府の役人も以前と同じ割合で税を納めるようにいってきたからです」(第六信、九一ページ)。

農村におけるこの定常状態こそは、首都の興奮の空しさを雄弁に物語っているわけである。ところで首都においては政権獲得劇が演ぜられ情勢は猫の目のように変化していた。「一〇日このかたフランスの運命は、ラフィット氏とカジミール・ペリエ氏のラケットによって、まるで羽根のように打ち交わされている」(第四信、八三ページ)。ざっとこんな調子で政治家同士の駈引きが行なわれていた間、内政は優柔不断な措置に終止していたのである。とはいえ憶病な歴代内閣の路線のなかで一貫して貫かれている思想は、「深遠なる平和のために(……)カルリスムにへつらい、ボナパルティスムに与し、共和派に浅薄な譲歩をする」(第一七信、一三四ページ)一方、人民については軍隊を通じて脅迫するというものであった。バルザックによれば、純正中庸派の政府にはおよそ一貫した政治体系というものが存在していないのである。これは権力というものの性格からして由々しい事態である。それゆえバルザックは、ともかくも政府が強腰で事にあたることを望んでいる。その意味で彼はいう、

「政府が共和主義とカルリスムを重罪裁判所に召喚し、有罪の宣告を受けさせるなら私は大いに賛成するだろう。しかしこういう風に行動する為には、ひとつの計画をたて、ひとつの体系を採用し(……)容赦なく合法の雷火でもって粉砕しなければならない。この仕事を企てるほど強力な人物はどこにいるか?」(第一六信、一三三ペ

ージ)。

このようなバルザックの批判の実体は結局鉄腸政治家の到来を待つという、一種のボナパルティスムであった。この点は、彼の現政府批判が外交姿勢にまで及んだ時に明確となる。当時政府は七月革命の対外的影響にみずから恐れおののき、一貫して不干渉政策(ノン・アンテルヴァンション)をとっていた。しかし七月革命は神聖同盟体制に向けられた公然たる諸国民の反撃の合図であったから、イタリア、ポーランド、ベルギーなどで次々と民衆が決起し始めていた。当然フランスの世論は沸騰し、自由・平等・博愛の旗幟を鮮明にして、対外出兵を行なうべきだとの意見が多数を占めつつあった。バルザックもこの点では好戦的世論に味方しつつ「不干渉の原則は弱さからくる誤謬である」(第一〇信、一一一ページ)などといって、現政府を攻撃している。革命のダイナミズムは、辛じてこういうような世論のなかに残存していたのである。ところが「疲れきった」支配者を戴く政府はメッテルニヒの策略にうまうまとのせられたのであろうか、ただ手をこまねいて傍観しているだけである。

「ベルギーについていえば……世論は分裂している。われわれはだいたいのところ、ブルジョアジーが人民を裏切ったことを知ってむかむかしている。(……)ところでこの活動的で富裕な国が早晩争いの種になることは分っている。しかしわが国の態度は本当に生ぬるいものだ」(第一信、七〇ページ)。

ポーランドのワルシャワでも蜂起があった。「そうだ！　ワルシャワはわれわれの問題だ」(第九信、一〇二ページ)。ところが「なんということだ！　われわれは外交によって滅茶苦茶にされている。(……)ポーランド人民は立ち上ったがわれわれは宥めすかされている。われわれは芸術を望み平和を欲しているというわけだ。ポーランドはわれわれの身代りである。彼らはわれわれの為に死にわれわれは彼らのおかげで生きている……。(……)外交はこれ

ら各国の革命によっていずれもその力を弱められるどころか、ますます力を強めている」（第一三信、一二〇ページ）。そこで軟弱な政府は外交においてひけをとらぬ為に、かの老タレーラン公をかつぎだしたのである。しかしバルザックによれば、今必要なのは外交なのではなく戦争なのである。

「戦争はフランスにとって平和の不確かさよりずっと利益がある。優柔不断（アンデシジョン）は、われわれを数ケ月にわたる交渉に沈みこませてきたが、それは金持からプロレタリアに至るあらゆる社会的立場のなかに反映されている。（……）パリの要塞化はわれわれの国境であり、そしてわれわれの国境、それはわれわれだ」（第八信、一〇二ページ）。

だがこのような革命戦争の遂行を許す条件とは、人民の熱狂を組織しうる有能な指導者＝鉄腕政治家（ジャンド・ファテール）が存在することである。すなわちカルノー、ロベスピエール、ナポレオンが存在することである。同じことがポーランド解放に言及しつつ語られる。

「ポーランドは多分解放されようが、それはクロピスキーの鉄腕が国民的意志に一体的運動を刻印しているからである。一方ベルギーは（……）無政府状態（アナルシー）と貧窮のうちにある。ひとりの人物を欠いている為に！……ここにこそ諸国民がじっくりと考えてみなければならない教訓があるのだ」（第一二信、一一九ページ）。

現政府は「優柔不断と軟弱さ」（第一五信、一二八ページ）を特徴としているから鉄腕政治家などいないのである。内閣も無力である（第一六信、一三一ページ）。その結果フランス人は「無気力状態」に陥っており、「イタリアの諸事件も殆ど注意をひかない有様」（一三三ページ）である。

以上みてきたように、バルザックは七月王政を徹底的に批判しているが、その基本に座っている原理というのは、権力は強力で集権的、正当なる体系を支柱としたものでなければならず、議論される権力などおよそ無意味（ベ

ナシスの見解を想起せよ）である、というものである。実際彼は「体系」を神にもなぞらえ（第一〇信、一〇九ページ）、衆愚政治を皮肉ったり（第一二信、一一九ページ）、権力の動揺を非難している（第一八信、一三九ページ）のである。こうした論調のなかには既に後年のレジティミスムを髣髴たらしめるものがあるわけだが、ここで内政面でのバルザックの主張を簡単にみておこう。

(3)　純正中庸派、ドクトリネールの治政に対するバルザックの非難はみてきた通りであるが、ではバルザックはどんな政体を望んでいたのであろうか？　この点を『手紙』からうかがい知ることは比較的容易である。

まず彼は第一〇信においてフランスの歴史を若干検討したのち、現在闘争しているのは「絶対君主をなくせ」という原理と「議会をなくせ」という原理だと断言している。この両原理とも「滅びはしない。なぜなら共和主義が滅びないように貴族も滅びないからだ。いずれか一方の勝利を確実にするには、数百万のもてる者を殺すか、数百万のプロレタリアを愚にするかでなければならない」。こんなことは誰にもできっこないとすれば、「最善の政府はこの二つの体系を互いに対立させ、それぞれ大衆のために不断の生産意欲を燃えたたせるようにしながら、結果にかんしては無力の状態においておく」政府だということになる。こうした政府が「純正中庸」の政府と違う点は、まさに二つの相異なる体系を巧みに操作できる能力を備えている点にある。貴族制と共和制を超越しうる第三の体系とは、かつての王政復古期のように、あるいはメッテルニヒのように「ヒエラルキーと力」「建前におけるデスポティスムと本音における独立」を保持していなければならない。これを側面的に支える観念、それはかつての神聖同盟の理念「ウナ・フィデス、ウヌス・ドミヌス」すなわち王位の正統性（レジティミテ）とカトリシズムのようなものではないか？　概略すればこんな風な議論を彼はここで組立てている。しかし彼はまだメッテルニヒ的体系を全面的に受け容れているわけではない。彼はただ類比を行なっているだけである。しかもメッテルニヒがもっぱら「あらゆるもてる者の代弁者」となっ

たという事実を彼は書き留めることによって、絶対王政そのものであるが如き体系には一定の留保を行なっているのである。彼はあくまで第三の体系をさがしているのである。この模索は、君主政と共和国とを超越した強権を樹立するという目標をめざして続けられるが、第一五、第一六信に至ってひとつの形を付与されることになる。いわく、

「フランスの願いは立憲王制である。それは法の前での平等を実現し、委任と受任の見事なヒエラルキーを創造する。これによって最初にしてもっとも単純な集合＝コミューンから、もっとも権限を有した県に至るまで〔その意志が〕つねに代表されることになる。しかもこの新しい機構の働きによって、知的・財政的能力は、それぞれのメリットに応じたかたちで、たえず国家の頂点に集中されるはずである」。

第一六信では「集合」が更に具体的に拡張されて、家族が社会の原基とされ、ついでコミューン、第三にカントン、更に県があって最後に議会があることになっている。このヒエラルキーのなかで、「寄せ集められたコミューンや家族の首長は、各カントン毎に、人口比によって」それぞれの代表を選出する。しかしバルザックはここで、投票者資格から財産制限を除去し、かえって被選挙人に厳しい財産制限を設けるように提案している。これはバルザックが七月革命の結果を考慮に入れたものと考えられる。以上の提案からわれわれはバルザックの政治理念をうかがい知ることができる。まず第一に、家族→国家というヒエラルキー的構想はボナルド風のレジティミスト的発想であるということ（のちに父権という観念がこれに加わるがゆえに、ボナパルティスト的発想といってもよい）。そして第二に彼は七月革命の原理全体を議会制度の確立の必要性という点に主として存すると考えていること。それゆえ彼は専ら強権と選挙制との妥協、選挙制を前者の補完物として活用しうる道をさがしているのである。もとよりバルザックは政治の専門家ではないから首尾一貫した体系を主張してはいないし、またそんな能力ももち合わせてはいなかった。

ただ彼は若干共和制に譲歩しつつも、強力な統一性（ユニテ）を具有した君主制を考えていることだけは事実である。しかもそうした構想を抱かせた原因が、実は七月王政のアナルシーであったということである。こうして彼の第三の体系はなんの変哲もない立憲王政に還元されたわけであるが、そうはいってもこれがドクトリネールに反対してうちだされた構想である限り、レジティミスムに傾斜してゆかざるをえないのである。ではなぜ彼は共和制を採用するに至らなかったか？

(4)　バルザックが共和制を採用しえなかった理由は、彼の民衆観のうちにある。彼は第二信において大革命時代の領土拡張論者ロベルジョの口をかりてこんなことをいっている、

「ジャーナリストらは諸国民の秀れたモラルを喧伝している……だがヨーロッパの革命が可能であるなどと信ずることは大きな誤りだ。プロレタリアはどこの国でも教育されていない」（七二ページ）。

バルザックは『手紙』全体を通じて民衆のエネルギーについては――恐怖に近いほど――高く評価している。ヨーロッパの至る所で革命を起こしているのは彼らだからである。しかし「彼らは恐るべき力を有するがその力は盲目である」（第一〇信、一一〇ページ）と彼はみている。同様に彼は第一五信の冒頭において、パリの民衆の謝肉祭での「狂人の宴」の様子を描写している。そして彼らの盲目的エネルギーが叛乱に注ぎこまれはしまいかという危惧を表明している。こういう民衆観はそのまま『田舎医者』のベナシスの立論にもちこまれて、「無知で人数のみ多い大衆」とか「彼らには政治に参加する能力がない」とか「庶民にはただできあいの幸福さえあればよい」といった一面的な考えとなって集約されてゆくのである。それゆえバルザック＝ベナシスの考察および関心は、いかにすれば「無知で不幸な多数の民衆」を幸福にすることができるか――ひいてはこの幸福が権力の安定を保障する――という点に集中

されるわけである。こうした民衆観が形成されてきた背景には時代の特質といったものがあるのである。バルザックだけがこのような民衆観をもっていたわけではなく、この時期の知識階級には多かれ少なかれ彼と共通した傾向が見出される。サン・シモンでさえバルザックとそれほど異なっていたわけではない。共和派に転ずるはずのヴィクトル・ユゴーも民衆に対する「共感」はもっていたろうが……。ところで共和主義の原則とは、このように把握された民衆に、彼らの議論に権力を委ねることである。それは不可能である。もしそんなことを実行すれば社会はたちまちアナルシーに陥るだろう。このような推論は果して正確だろうか？　多くの歴史家はこの正確さについては認めている。現に七月革命の遠因でもあった農民騒擾といい、パリの手工業者のストライキといい、いずれも支配者たらんとした階級によって利用されただけであった。民衆は革命の動力ではありえても、いまだ主人公ではない。まさにこの事実からバルザックの立場決定の困難さが由来しているのである。

(5)　バルザックは自分がどのような党派に属すべきであるか、あるいは属すことになるだろうかということについて暗示的に語っている。まずそれは第二信の末尾の党派分析のなかに表現されている。彼はここで五党派を分類している。第一は国民派（ナショノー）だが、この党派は進歩派と抵抗派に分裂しているものの「ルイ・フィリップを支持している」ゆえにバルザックはこれを簡単に片づけてしまう。第二に、そして比較的詳しく分析されているのはレジティミストである。彼はこの党派は「数こそ少ないがもっとも影響力のある」党派だといっている。また「あらゆる不満分子を糾合しているがゆえに（……）もっとも危険であると思われる」と評価している。バルザックは政治体系の正統性を重んずるゆえにこの党派を危険視しているのであるが、このような見方は容易にこの党派の支持に転化する色彩をもっている。なぜならルイ・フィリップ政府の動揺にバルザックが愛想をつかしたとすれば、もっとも首尾一貫した体系たるレジティミスムの支持へ彼が向かってもなんら不思議ではないからである。現に『手紙』の最後はシャトーブ

リアンが共和国と絶対主義以外の第三の道はありえないとして野党（＝レジティミスト）の立場にたっていることを「国にとって不幸なこと」（第一九信、一四三ページ）と嘆く言葉で終わっているのである。バルザックなりの第三の道が、今までみてきたような立憲王政のそれであってみれば、レジティミスムに対する同情も自然な成行きであるといえよう。第三の党派はボナパルティストであるが、彼はこれをわずか一行で片づけている。そうであるからといってバルザックがこの党派を分析していないというわけではない。第一〇信ではかなりのスペースをナポレオン二世の為にさいている。そこで彼はナポレオン一世の偉大さを讃えているが、ナポレオン二世については無能扱いしている。ここにはボナパルティストに対するバルザックの態度が現われている。すなわち主義は別として彼らの戴く指導者が有能ではないというのである。この態度は『田舎医者』の「人民のナポレオン」の章においても現われてくるであろう。それゆえバルザックはナポレオン一世の如き鉄腕を期待していたが、党派としてのボナパルティストにはなんら期待していなかったといえよう。さて第四の党派は急進派（ラディコー）である。いいかえれば「大革命の原理」の担い手たる共和派である。彼は共和派のドクトリンは「フランスほど見事に階級分けされた国では決して普及するものではないでしょう」といっている。すなわちエゴイズムが強力に根を張ったこの国では平等主義――共和主義など空想にすぎないというのである。彼は更に鋭く指摘していう、

「承知しておかなくてはならないことは、髪の毛を延ばしっぱなしの思索家が、万人に一片のパンを分配しようと望んでも、産業者の方は権力にみずからも与らんがためにのみ社会の最高部を転覆しようとしているのだということです」

しかも民衆に過度の自由を与えることはアメリカの二の舞になる。「貧しい階級のなかの有能な人々に進出の手段

を与える」一方、「上層階級の安寧も保障しなければならない」。これがバルザック流の共和主義であり、それは既にみたように議会制度を採用した王政を意味していたのである。先に述べた急進派批判はそっくりそのままサン・シモン派の社会主義に対する非難に使われる（彼はサン・シモン派が小ブルジョアの遺産を没収しようとしていると非難している）がここでは述べないことにする。さて最後の党派はカルリストであるが、バルザックはこれを早晩レジティミストと一体化するだろうとみている。これは正しい指摘であるので、われわれはこの党派を取り扱う必要がないと考える。

このような党派の分析からしてバルザックが選択しえた党派が、レジティミストかボナパルティストのいずれかであったと結論づけてもよいであろう。彼は一貫して民衆の巨大な圧力と権力の正統性・一貫性との間の均衡を実現しようと考えていた。このマキャベリ的均衡を実現しうる指導者がナポレオン的人物なのであろう。バルザックはもとより同時代の文学者を捕えて離すことのなかったナポレオンに対する強い崇拝の念が、こうした危機にあたって再びその力を盛り返し、バルザックにおいてはそのレジティミスムを補完する役割を果したと考えることは自然であろう。それゆえにこそ、『田舎医者』においては、ナポレオン崇拝とベナシスの政治論との奇妙な合体が試みられたのであった。

★

バルザックの政治観をいかんなく表現した『手紙』は一八三一年三月二九日付でもって終わっている。この間に『あら皮』が『カリカテュール』に掲載され、七月革命後の青年の挫折感を表現して話題をよんでいた。『手紙』にもまた青年の失意をうかがわせる文章がある。

「われわれは権力を移しかえる為に行動した。けれども権力は変わらなかった。その教義は同一のものであった。それはエゴイスト的権力で自分のことしか考えない。権力はシーソーの如き偽れる体系をなお有していて、われわれの革命を王政復古がのみこまれていた無関心という深淵へ導き入れようとしている」（第一九信、一四一ページ）。

そこでバルザックは七月革命の失敗を「王国司令官に三ヶ月間しか独裁権（ディクタトゥール）を与えなかった」点にあると清算的評価を加えるのである。ここでも「人民の諸権利と玉座の諸権利を強力に確立する」ことが彼の希望であったことが分る。実際既に繰り返し述べたように、彼の政治観の根本には、単に貴族の利益（滅びゆくものの権益）の擁護があっただけではない。彼も繰り返すところであるが、人民の利益をこれと調和させることも彼にとっては重要であった。今後彼のたどる政治的コースはこの空想的・調和的原理にそったものとなろう。

フランスは、七月革命以来、銀行家・大株主・産業者・大地主等からなる金融貴族の支配するところとなった。期待されていたブルジョアジーの天下がやってきたのである。しかしその支配はバルザックにいわせれば、無秩序と動揺を拡大しただけであった。本質的にブルジョアジーは政治能力を具有していないのではないか？　とバルザックは考えたに違いない。彼らはなるほど経済能力は人一倍もっている。

「資本家は金庫の底に金をしまっておいたり財布のなかに手形を入れておいたりするのに飽きてしまって、万一を見込んだうえで、それらをなんらかの投機に賭けようとしている」（一四二ページ）。

しかし統治能力はない。まさに統治能力とは、伝統的に形成されてくるものだからである。バルザックが政治といい統治といい、その諸問題にふれる時、必ず過去の英雄の例をもちだしてくるのも当然のことである。ブルジョアジ

ーは経済権を掌握していたが、イギリスを除けば、長期間政治にたずさわり、国を支配したことがないのである。「教育されてない」のは人民ばかりでなくブルジョアジーもそうなのである。これにかてて加えて、近代市民社会の経済法則＝資本主義生産の本質的無政府性が存在する。ブルジョアジーは以上の事実から往々にして貴族と妥協し、彼らの秀れた統治能力に学ぼうとする。それゆえフランスには貴族の精神的権威が真の共和制の確立期に至るまで残存することになる。ところでバルザックについていえば、彼はブルジョアジーの政治的無能さを感じとっていたから、それだけに七月王政の危険性を意識していたといえる。なんとしても「共和国と絶対主義との間」にある政府をつくらなければフランスはアナルシーに陥ってしまう。こういった憂情をわれわれは『手紙』から感じとることができる。バルザックの焦りにも似た危機感には、そのうえもう一つの重大な要素が加わる。すなわち彼の批判してやまないエゴイズムが、ブルジョアジーの生産の無政府性によって拡大再生産され始めたことである。バルザックが『セザール・ビロトー』の主人公およびポピノを救おうとして、「経済外的強制」を介入せしめたのと同様に、七月王政成立直後の社会に対して彼は反ブルジョア的な政治理念を介入せしめようとしている。その役割を担って登場してきた政治原理が、「もっとも危険な」レジティミスムのそれであったとしても不思議ではない。

バルザックは概略以上のような動機によって反近代的政治思想を抱懐するに至った。こうした世界観――イデオロギーはバルザックの全作品を濃厚に彩るであろう。バルザックが小説の欄外に書きつけたイデオロギー的評言を通俗的意味でのリアリズムに反するものと受けとってはならない。近代市民社会成立期の批判的リアリズムは、まさに反近代的（この意味で反動的）世界観を挺子としてしか獲得されなかったのである。この点にこそバルザックの悲喜劇があったわけである。